

[特別活動]

望ましい人間関係とルールマナーの定着を目指した学級集団の育成

— 学年での共通実践・人間関係のスキル定着を目指した実践から —

田原 朋子*

1 目的

(1) はじめに

「学級崩壊」という言葉が聞かれるようになって10年ほど経つ。集団を形成できない、仲間とかかわりをもつことが苦手である、自分の気持ちを相手に上手に伝えられないなどの特徴が近年の生徒に見られる。佐世保の少女殺害事件や県内の三条市で起こった殺傷事件などに見られるように、普通の学校生活を送っていた生徒が突如「学級」で事件を起こすようなケースも起こっている。その背景には、子どもを取り囲む社会環境の変化や家庭環境の変化が大きな要因となっているとも考えられる。中学生は、思春期を迎え自我の芽生えから他を意識するようになる年頃である。周囲の影響を受けやすく、心の葛藤をしながら自我を確立し、大人へと成長していく。しかし、周囲とのかかわりを十分持つことなく自分の世界に閉じこもり様々な経験や心の葛藤をすることなく成長するため、集団に対応できない中学生が多くなっているように思う。学級崩壊は、様々な要因によって起こっていると考えられるが、人とかかわり方を知らずに学級集団を形成しようとするところに大きな原因があると考えられる。学級は社会生活を送る上での力を付けるための大切な場である。前述したような近年の生徒の実態からも、望ましい学級集団を作ることは困難になってきている。学校や教師はどのような手立てでこの問題を解決するのか、また他とのかかわりをもつ力や集団生活を営む力を育てていくか真剣に考え、取り組んでいかなければならない。

(2) 生徒の実態

当校に赴任した3年前に1年生の学級担任をし、持ち上がりで現在3年生の学級担任である。現学年は4つの小学校から集まり、1クラス38人程度の4学級から成り立っている。小学校からの引継ぎでは、全体的に落ち着いた生徒達であることがわかった。入学当初は、明るく活発なリーダーが学級を引っ張ることができた。しかし、1年生の5月頃から何気ない言動で仲間を傷つけたりし、人間関係でトラブルが起こるようになってきた。また、男子では威圧的な態度で仲間を攻撃する生徒が学年の中に2名。女子ではリーダーシップを発揮するときもあるが、自分の思いを通そうとし、わがままな言動を取る生徒がどの学級にも2、3名程度いた。

(3) 目的

望ましい人間関係を作るためには、子どもの自主的な働きかけだけでは困難である。よって、教師が意識して援助しなければ望ましい学級集団を形成し、維持することは困難である。

望ましい学級集団とは、

目的①適切に人とかかわりをもてる集団

目的②適切なルールとマナーがある集団

であるとする。学級活動では、体験的な活動を取り入れながら目的①②を身に付ける内容を実践する。道徳教育では、関連付けた内容を取り入れながら、主として個々の社会性を伸ばす内容を実践する。

上記の集団(目的①②)を実現するために、学年共通実践や学年一斉学活を実施し、学年の生徒全員が同じスキルを身に付け、様々な場面で身に付けたスキルを発揮して人間関係作りができるように指導・援助した。

今研究は、目指す学級集団の姿として目的①②を設定し、その実現を目指して実践①～⑦を実施したものである。その成果を分析するためにソーシャルスキル尺度を活用し、有効性や実践内容の改善を図った。これらの実践の有効

*上越市立直江津中学校

性について結果分析の視点から調査分析する。

2 方法

客観的な資料として、「ソーシャルスキル尺度」を使って調査した。この調査は2種類のスキルからなっている。学級生活に高い満足感を持っている学級では、2つの得点が全国平均よりも高いことが示されている。

- ①配慮のスキル：対人関係における配慮のスキル「何か失敗したときに、ごめんなさいと言っていますか」「友達が話しているときは、その話を最後まで聞いていますか」などの対人関係の基本的なマナー
- ②かかわりのスキル：人とかかわるきっかけや関係の維持、感情交流を形成するかかわりのスキル。「みんなと同じくらい、話をしていますか」「自分から友達を遊びに誘っていますか」など、能動的な行動が伴っている。

- (1) 被験者：中学1年生150名
- (2) 時期：2003年7月、2003年12月、2004年5月
- (3) 測定尺度：ソーシャルスキル尺度は、河村茂雄『育てるカウンセリングシリーズ3 グループ体験によるタイプ別！学級育成プログラム中学校偏』図書文化、2001、PP・81～87を用いた。

3 実践

目的① 「適切に人とのかかわりをもてる集団」の育成を目指した具体的な取組

ソーシャルスキルトレーニングやアサーショントレーニング、グループワークトレーニングを活用し、体験的な活動からコミュニケーションの基本的なコツを取得する。

目的② 「適切なルールとマナーがある集団」の育成を目指した具体的な取組

話し合い活動を通して、学級内に必要なルールやマナーについて考え主体的に実践する態度を育てる。

○：ねらい

	目的① 適切な人とのかかわりのある集団の育成を目指した取組	目的② 適切なルールとマナーがある集団の育成を目指した取組
1 学 期	<p>実践①聴き方伝え方を学ぼう(ソーシャルスキルトレーニング) ○正しく伝えること、真剣に聴くことの大切さを学ぶ。 ○人は過去の経験により先入観を持って聴いたり、感じたりする。同じ事を聴いてもそれぞれ違った受け止め方をすることがあることに気づく。</p> <p>実践④協力することを学ぼう(グループワークトレーニング) ○グループで課題を解決する過程において、協力して取り組むことの大切さに気づく ○グループのコミュニケーションづくりと協力体制づくりをする</p>	<p>実践②話し合いの約束 ○年間を通しての話し合いのルールを自分たちで考える。</p> <p>実践③席替えのルールを考えよう ○お互いをより知るための席替えのルールを考える。 ○公平、思いやり心を育てる。</p>
2 学 期	<p>実践⑤あたたかいメッセージ(ソーシャルスキルトレーニング) ○日頃の言動について振り返り、「ほめる」「励ます」「心配する」「感謝する」などの優しい言葉を状況に応じて使えるようにする。</p> <p>実践⑥協力することを学ぼう(グループワークトレーニング) ○お互いを理解するためのコミュニケーションのとり方について学ぶ。 ○リーダーシップとチームワークについて学ぶ。</p>	
3 学 期	<p>実践⑦3つの話し方(アサーショントレーニング) ○自分も相手も大切に話す話し方について学ぶ。</p>	

図1 実践内容と目的

(1) 1学期の実践

実践①話の聴き方伝え方を学ぼう『星と家』

班（6～7人）で活動する。一人が伝達文をゆっくり、はっきり、丁寧に、大きな声で読む。その他の人は、その伝達文【図2】を聞き取り、聞き取った通りに紙に書く。質問は受け付けない。

『星と家』が書かれた絵ができるのだが、聴いた伝達文だけでは正確に聞き取ることはできず、一人一人違った絵が出来上がる。【写真1】お互いに描いた絵を見せ合った後、どうすればみんなが共通理解し、同じような絵を描くことができたかを話し合った。

その中で、聞く側からは「質問をして、どんな風に描いたらいいのか具体的に聞きたかった。」「もう少し、ゆっくり伝えてほしかった。どう描けばよいか考えている間に次の伝達文を聞き逃した。」などの意見が多くでた。伝える側からは、「みんながわからない顔をしたり、悩んでいるときにわかりやすく伝えなかった。」「全員のペースに合わせずに、自分のペースで読んでしまった。」などの反省がでた。これらの意見や反省から、実践②につなげた。

実践②話し合いの約束

一人一人が自分の意見をもって話し合いに参加できるように、次のような形式を基本に話し合いを進めるようにした。

- ①各自が考える時間を設け、自分の学習プリントに記入する。
(のりつき付箋を活用するケースもあり)
- ②座席を話し合いの隊形にし、自分の考えを仲間に発表する。
- ③班で考えをまとめる。
- ④各班の考えを発表する。
- ⑤学級の考えをまとめる。

特に、①②の活動を意識させ一人一人の意見を大切にしました。実践①「話の聴き方伝え方を学ぼう」を参考にして、話し合いをするときの約束事を決めた。それぞれの立場での姿勢がわかるように、「発表するとき・聴くとき・話し合いの場面」という3つに分けて約束事を決めた。【図3】この1年2組の話し合いの約束は、学級掲示し1年間活用した。自分たちの手で考えた約束であり、どの生徒も意識して取り組む姿勢が見られた。また、忘れかけたときには全員で確認することもできた。【図4】

1年2組話し合いの約束

発表するときは、

- はっきり・ゆっくり・大きな声で発表しよう
- みんなにわかりやすいように考えて話そう

聴くときは、

- 発表者の方に身体を向けて、真剣に聴こう
- 仲間の意見を批判せず、まず聴こう

話し合いでは、

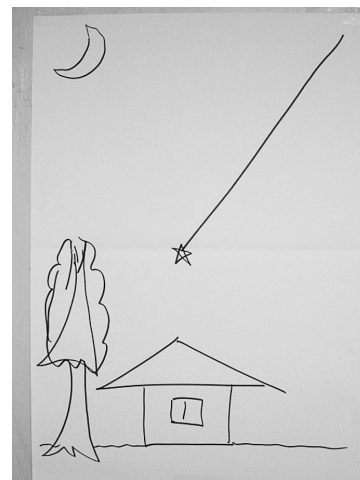
- 自分の意見・考えをしっかりと持とう
- 真剣に臨み、より良い考えを作り出そう

【図3】

伝達文の内容

- ① 右上から左下へ線を半分ほど引いてください。
- ② その線の先に星を1つ書いてください。
- ③ その星の下に家を描いてください。
- ④ その家の左に木を描いてください。
- ⑤ その木の真上に三日月を描いてください。
- ⑥ 地平線を描いてください。

【図2】



【写真1】

席替えのルールを考えよう!

1年 組 番 氏名

席替えの目標

- 自分と違う人との理解を深め、いろいろな人と付き合う力を付けるため。
- 多くの級友と仲良くなり、楽しい学級をつくるため。
- 学習や学級活動（給食・清掃・係活動）が行いやすい雰囲気をつくるため。
- 学級の雰囲気を変え、がんばろう!というムードをつくるため。

1、席替えの目標達成のために、大切なと思う席替えのルールをきめよう。

みんなを出した「席替えルール」	あなたの順位	班の順位

2、班で考えた「大切なこと」を達成するために良いと思う席替えの方策を考えよう。

【方策名】

【やり方】

【図4】

実践③席替えのルールを考える

5月に入り出席番号での座席から、新しい座席・班編成を行った。この座席・班は、5月下旬にある学級遠足の活動を行うことになる。数名の生徒に、小学校での席替えの方法について聞いてみると、くじ引きや先生が決めていたということだった。この時点での学級の状態は、まだ人間関係が狭く特定の生徒とのかかわりしか持っていなかった。また、「新しい班は、仲の良い人と一緒の班になりたい」という気持ちを多くの生徒が持っていたので、もう少し様々な仲間とかかわりをもてる席替えをしたいと考えた。まず、席替えの目標を提示してどのようなルールが必要か生徒に考えさせた。出された意見の中で、大切だと思う順番を個人で考えた後、班で話し合いをして班の順位を決めた。その後、この意見をリーダーでまとめ「出会いの広がる席替えのルール」を作った。

【図4】【図5】

実践④協力することを学ぼう『財宝を探せ』

新しい班になって、お互いのコミュニケーションを高めるために取り組んだ。この課題の目的は、①グループで課題を解決する過程において、協力して取り組むことの大切さに気づく②グループのコミュニケーションづくりと協力的体制づくりである。活動内容は、

- ①一人一人に数枚の情報カードを配布する。
- ②配布された情報カードの内容は言葉で仲間に伝える。
- ③お互いの情報を整理して課題である財宝のありかを探し出す。

この活動では、普段自分の意見を言えない生徒も自分の持っている情報カードの内容を言葉で伝えるという役割を必ず果たさなければならない。課題を解決するためには、協力して様々な考え方を話し合わなければならないのである。ある班では、班長がリーダーシップを発揮して課題を解決させようと努力したができなかった。この班の振り返りでは、「班長が、がんばってみんなをまとめていた。」「班長に頼りすぎてしまった。」という反省が書かれていた。これらの振り返りから、次の2点が大切であることを学級で確認した。協力するという事は、①自分のすべきことをする・自分の考えを主張する。②仲間の考えや行動を認め、助け合いより良い方向へ導くことが大切である。班での係活動や清掃活動などでもこの2点を意識して声かけをして取り組むことができた。

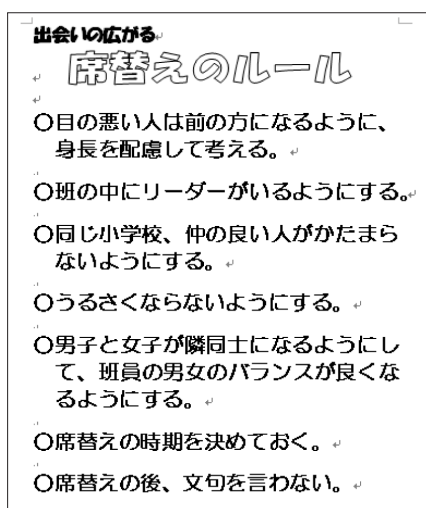
(2) 2学期の実践

実践⑤あたたかいメッセージ冷たいメッセージ

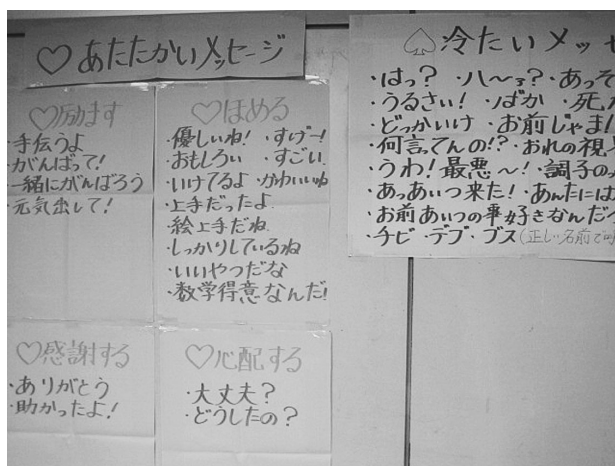
1学期の終わりごろから、男子では安易な一言で仲間を傷つける。女子では陰口悪口などで悩む生徒が出てきた。そこで、「自分が同じことを言われたらどうか」を考える授業を実践した。生徒は、「自分が言われたら嫌なのに、自分も仲間に言っていた。」ということに多くの生徒が気付くことができた。振り返りでは、「弱い立場にいる人の味方になってあげられる人になりたい。」「人の喜ぶことをしたい。」「ありがとうなど大切な言葉を言える中学生になりたい。」というように、前向きな考えを持つことができた。しかし、2学期に入ってもなかなか減らなかったため、ソーシャルスキルトレーニングを実践することにした。

目的は、自分が普段使っている言葉が、相手にどのような影響を与えるか考え、「ほめる」「励ます」「心配する」「感謝する」などの優しい言葉を状況に応じて使えるようにする。冷たい言葉が、仲間を傷付けたり周囲の仲間には不快感を与えることを理解することである。

この実践は、学年一斉で行った。学年の生徒全員が同じ方法を知っていて、活用しようとする姿勢を持つことができた。授業で使ったあたたかいメッセージを掲示し、意識付けを行った。【写真2】日常生活の中で生かせるように、メッセージボックスを用意し、日常生活の中で仲間から言われたあたたかいメッセージや冷たいメッセージを記入し



【図5】



【写真2】

て入れてもらった。あたたかいメッセージは掲示し、冷たいメッセージは終学活で「残念だ…」という気持ちを伝えながら紹介した。あたたかいメッセージを意識して使う姿や、冷たいメッセージを使っていることに気づき、その場であやまる姿や仲間に指摘され反省する姿が見られた。

実践⑥協力することを学ぼう『教室はどこだ?』

2学期になり、席替えのルールに基づいて班の構成メンバーを替えて実践⑥を行った。1学期に行った実践④と同じ目的で課題を替えての実践である。この活動では、前回の反省①自分のすべきことをする・自分の考えを主張する。②仲間の考えや行動を認め、助けあいより良い方向へ導く。この2点を意識して取り組む生徒が増えたためか、課題を解決することができた班が増えた。学級の中心的なリーダーであるA子は、実践④のときにはリーダーである自分がこの課題を解決させようと努力した。しかし、アイデアが偏ってしまったため課題を解決させることができなかった。実践⑥ではそれぞれの情報を整理する役割とそれぞれの考え方を導き出すように努力して働きかけていた。A子の感想では、「みんなの考えを聞こうと努力した。みんなが色々な意見を言ってくれたのでうれしかった」と書かれていた。同じ班員の感想には、「Aさんがみんなをリードしてまとめてくれた。みんなで課題を解決できたので楽しかった」と書かれており、協力して取り組むことやそれぞれの役割について理解ができたようである。

(3) 3学期の実践

実践⑦3つの話し方

3学期の実践では、3つの話し方を実践した。これは、アサーショントレーニングの実践である。アサーションとは、「他者の基本的人権を侵すことなく、自己の基本的人権のために立ち上がり、自己表現する方法」である。人とやり取りをする際の話し方はその特徴によって大きく3つに分けることができる。①非主張的な話し方：『自分をないがしろにして相手の気持ちを必要以上に大切にしようとする』②『攻撃的な話し方：相手の気持ちをないがしろにしてまで自分の意を通そうとする』③アサーション：『相手も自分も大切にしようとして、両者が折り合える地点を探そうとする』である。

2学期に行った実践⑤のあたたかいメッセージ（ソーシャルスキルトレーニング）が定着してきた。そのため、あたたかいメッセージを意識して学級の仲間との関わりを持つようとしている場面が見られた。しかし、仲間に対して冷たいメッセージを使ってしまう生徒もいた。その時に、言われた生徒が、相手に嫌だと感じていることを伝えるようになって欲しいと考えアサーショントレーニングをやってみることにした。

この授業では、モデリングで教師が3つのパターンをやってみせ、③のアサーションを実際に生徒がロールプレイした。2学期の「あたたかいメッセージ冷たいメッセージ」でロールプレイのやり方を理解していたため、隣の座席のペアでの活動も意欲的に取り組むことができた。大半の生徒にとっては、「自分も相手も大切にする」という点が難しく感じたようである。ロールプレイの場面設定で考えてできたことが、現実の場面ではなかなかできないと感想に書いた生徒がいた。

4 結果

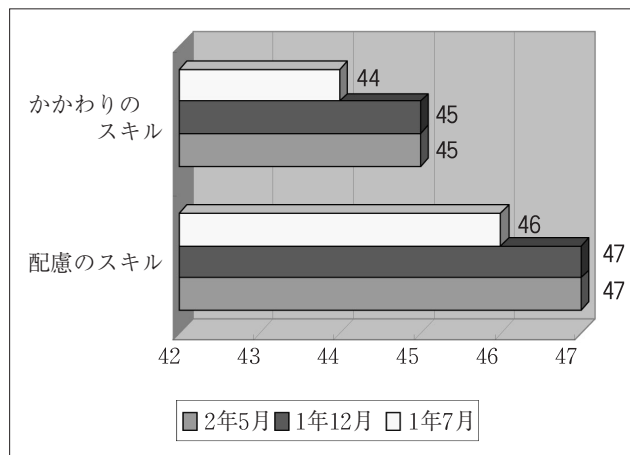
(1) ソーシャルスキル尺度の結果

1年生の7月のソーシャルスキル尺度の結果【図表1】では、配慮のスキル45・かかわりのスキル44ともに全国平均の46を若干下回る結果であった。ソーシャルスキル尺度から見たタイプ【図表2】【表1】を見ると、タイプAが11%と目立つ。2学期の実践の結果、12月のソーシャルスキル尺度の結果は、配慮のスキル47・かかわりのスキル45と向上した。様々な実践の成果が表れていると言える。特に変化が現れたのは、【図表2】タイプA・タイプBの非社会的と認識される生徒の減少と、タイプDの増加である。2年生の5月の結果から、タイプBが増えたことが気になるがタイプDは増加している。このことから、様々な実践を通して対人関係や集団活動へのかかわりが良好な生徒が増加し、さらにその成果は学級が変わっても維持できていることがわかった。タイプCについては、変化が見られなかった。このタイプには、リーダー的な存在として力を発揮している場合もあり、教師や本人が現状に満足していたり周囲に認められることが考えられる。

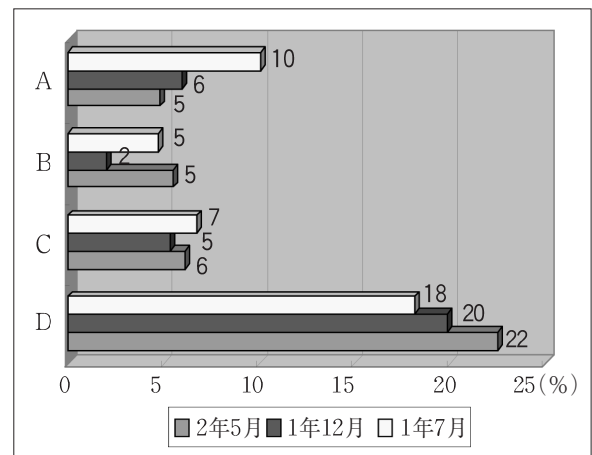
5 考察

1年間を通しての様々な実践で生徒は「人間関係づくり体験活動」をしており、体験したことを学校生活の中で生かすことができていると、ソーシャルスキル尺度の結果から言える。「目的①適切に人とかかわりをもてる集団」に

については、一人一人のスキルが継続して身に付いている。また、学年共通実践や学年一斉学活を行ったことで学級が変わっても新たな学級構成があっても、学年全員が知っている共通したスキルがあることで、安心して力を発揮することができる。しかし、「目的②適切なルールとマナーがある集団」については、その集団（学級）で一度確認できれば継続されるとは限らない。なぜならば、ルールは一度確認して理解でき、行動に移せるものではない。また、言い続けなければ忘れてしまう。定着させるためには、集団が変わったり、時期が経ったりした時に確認することが大切である。また、生徒の成長や変化に応じて見直しも必要である。集団が変われば再度その集団で話し合い、自分たちのルールやマナーについて考え守ろうと努力することが、学級集団として大切であるとする。



【図表1】 ソーシャルスキル尺度



【図表2】 ソーシャルスキル尺度からわかるタイプ

6 今後の課題

今回の実践は、手探りの部分が多くあり計画的に進めることができなかつた。生徒の実態やその学年に身に付けさせたいコミュニケーション能力などを再度整理し、計画的に取り組むたいと感じた。

望ましい学級集団の育成として、ソーシャルスキルトレーニングなどの体験的な活動が有効であることは様々な文献にも書かれており実際に取り組んでいる人も多くいる。しかし、その必要性は社会全体にあると言える。社会の変化に伴う家庭環境の変化から、生徒の基本的な生活習慣やコミュニケーション能力が低下していることは明らかである。ルールやマナーの確認も昔なら当然のこととして誰もがわかっていたことが、今では教え確認しなければ守ることはできない。これからさらに、その必要性を感じながら実践を重ねていきたい。

【表1】 ソーシャルスキル尺度からわかる生徒のタイプ	
タイプA	配慮のスキル(低)・かかわりのスキル(低) 周りの子供から好かれず浮かれてしまい、孤立する傾向が強い
タイプB	配慮のスキル(高)・かかわりのスキル(低) 周りから排除されることは少ないが、友達を作れず本人はとてもストレスを感じている
タイプC	配慮のスキル(低)・かかわりのスキル(高) 相手の気持ちや状況を考えずに、自分の思いをぶつけてしまう
タイプD	配慮のスキル(高)・かかわりのスキル(高) 学級内で仲間から慕われ、対人関係や集団活動へのかかわりが良好

引用参考文献

河村茂雄 「育てるカウンセリングシリーズ3 グループ体験によるタイプ別！学級育成プログラム中学校偏」 図書文化、2001

國分康孝監修 「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校」 図書文化、1999

日本グループワーク・トレーニング協会監修、「GWTのすすめ」 遊戯社、2003

日本レクリエーション協会監修、「新グループワーク・トレーニング」 遊戯社、1995

園田雅代・中釜洋子 「子どものためのアサーション 自己表現 グループワーク」 金子書房、2000